

全国草原再生ネットワーク

草原がつなぐ、人・自然・文化

ニュースレターvol.6 (Apr., 2011)

<発行>全国草原再生ネットワーク
<http://www.sogen-net.jp/>

今回の報告地
書籍紹介を含む



■各地からの報告

◇阿蘇草原再生フォーラム「阿蘇の草原を未来へ」が開催されました！

3月18日(金)に大博多ホール(福岡市)で開催され(阿蘇草原再生協議会、環境省九州地方事務所主催)、福岡市民をはじめ、行政や経済界、そして阿蘇の野焼き支援ボランティアなど約120名が参加しました。「阿蘇の草原」と「九州の阿蘇」を、熊本県外で初めて組織的にPRする第一歩を踏み出す場となりました。

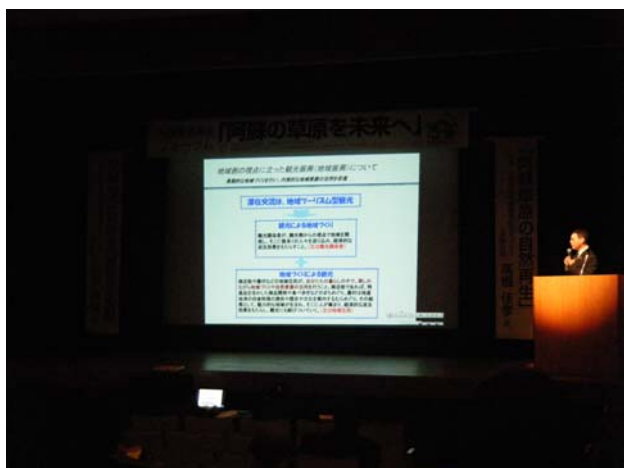
米澤和彦阿蘇草原再生千年委員会委員長の開会挨拶の後、まず、全国草原再生ネットワークの会長でもある高橋佳孝阿蘇草原再生協議会会長が「阿蘇草原の自然再生」について講演されました。その中で「福岡市の水がめを担う筑後川の水資源の源流は阿蘇にある」点や、草原再生や幅広い支援の重要かつ緊急性のある点、そして阿蘇草原再生募金の取り組

みの意義と緊急性の高い活動から使っていくことなどについて訴えられました。

続いて坂元英俊阿蘇地域振興デザインセンター事務局長は「九州地方における阿蘇観光の役割」について講演されました。草原維持や再生の活動と連携しながら、阿蘇に滞在する時間や機会を増やす取り組みを始めていることが紹介されました。

そして、佐藤義興阿蘇市長から「阿蘇の草原の重要性を、福岡から全国に発信していこう」と力強いアピールがあり、最後に主催者の環境省九州地方環境事務所統括自然保護企画官後藤乙夫氏が阿蘇の草原の恵みを総括的にまとめて閉会しました。

(宮永整一：阿蘇草原再生千年委員会)



◇「千の風」プロジェクト活動の今 長崎県対馬市

草花、朝鮮海峡、韓国釜山の山並み、そして青空を眺めながら草原に寝転がる。海から吹き上げる草原の甘い香りをのせた風は何とも心地よい。かつて千俵蒔山に置かれた防人、牛馬のために採草し、野焼きを繰り返しながら美しい草原風景を創り上げた先人たちは、この風をどう感じたのだろうか。今では、この風でクリーンエネルギーが生まれ、パラグライダーが風をつかんでいる。

千俵蒔山（標高 287m）は、対馬島の最北西端に位置する全山草原性の山です。壱岐対馬国定公園、長崎県重要里地里山に指定されるほどの美しい草原を有していましたが、約 40 年前の電波塔設置によって野焼きが出来なくなり、機械化農業の進展も相まって急速に森林化が進みました。1947 年には 105.9ha あった草原は、今では山頂部にわずか 7.4ha を残すのみとなっています。

「草原が荒れる姿を見過ごすことはできない」。この山を有する佐護区（対馬市上県町佐護地域にある 7 集落の自治組織：人口 750 人）では、美しい草原風景やツシマヤマメコをはじめとする希少な動植物を次世代に引き継ぐと、2007 年度から「千俵蒔山草原再生プロジェクト」（千の風プロジェクト）を立ち上げました。島の人たちの団結力と行動力はすごいもので、その半年後の 2008 年 3 月には約 40 年ぶりに野焼きを復活することができました。今年の 3 月 6 日には 3 回目の野焼き（約 5ha）を無事に終えることができ、春の風物詩・年中行事になりつつあります。

野焼きの他には、植生や歴史民俗調査、啓発活動（シンポジウムの開催や普及啓発物の作成・配布）に取り組んでいます。今後は、対馬市と協力しながら



千の風のポストカード

ら、絶滅が危惧される対馬馬（日本在来馬 8 馬種の 1 つ）の放牧やホーストレッキングなど草原の利活用も検討してゆきたいと考えています。

順調にプロジェクトが進んでいるように見えますが、いくつもの困難に悩まされています。野焼きの安全管理をどう徹底すべきか、実施体制をどう強化するか、予算はどこから捻出するのか。また、野焼きを復活してもその効果をどう実証するのか、一度森林化した草原をどう再生させるのか、再生した草原をどう活用するのか。

草原再生に関わり始めて、私の目の前に広がる草原はただの風景ではなくなりました。「景観 10 年、風景 100 年、風土 1000 年」。どれだけ人の働きかけが加わって草原風景が維持されてきたものなのか、その悠久さと里地里山の意味を噛みしめています。

（前田 剛：佐護区事務局長）

<http://sagoku.exblog.jp/i3/>



2011 年 3 月 6 日の野焼き



野焼きの後に花を咲かせたアケボノスミレ

◇菅生沼の火入れに参加しました

2011年1月23日にミュージアムパーク茨城県自然博物館主催の火入れが、茨城県菅生沼で行なわれました。菅生沼は茨城県坂東市と常総市に接し、利根川の支流の江川、飯沼川等の河川が流れ込んでおり約230haが茨城県の自然環境保全地域として指定されています。火入れは菅生沼に生育するタチスミレをはじめとする様々な植物を保全することを目的として、2003年から実施されています。火入れは当初は小さい面積で行なっていたそうですが、現在では約4.5haほどの面積で火入れを行なっています。

火入れ当日は、朝から50名程度の参加者が集まり、火入れの前に防火帯を作りました。参加者の中には草刈り機を持参している人も多くおり、また、それ以外の参加者もそれぞれ草刈り道具を持参している方もおられ、参加者の意識の高さがうかがえました。草刈りは1時間程度で終わり、その後、茨城県自然博物館の小幡先生と岐阜大学の津田先生より、菅生沼の植生や菅生沼の火入れの特徴等についての話が行なわれました。

さて、いよいよ火入れです。火入れは上流側と下流側の2カ所に分けて行ないました。博物館の学芸員の方が中心となって行ない、その他の参加者は安全な場所からの見学となります。火を入れると「パチパチ」と燃え広がる火。オギの植生の菅生沼では火の高さは10mを超えるのではないかと思うほどです。上流部は瞬間に燃え、先ほどまで枯れ草が広がっていた場所が黒い灰の平原となりました。下流部は土壌中の水位が高いためか上流部に比べるとなかなか燃えませんでした。予定通り火入れを終えることができました。

かつては、菅生沼周辺では火入れは柴焼き（柴火事）と称し、旧正月ごろに行なわれていました。



またカヤ刈や沼の藻を肥料として採ることも無くなり、植物等が沼に貯まることで陸化し、菅生沼の光景は随分昔の姿とは違うものになっているそうです。このような状況の中、この茨城県自然博物館主催の火入れは、植生の保全だけでなく、この地域の人の営みが生み出してきた「原風景」を守るためにも重要なことであると感じました。

（増井大樹：東京都在住）



◇伝統的な墓地が草原保全に果たす役割

淡路島では、カヤ場のような広大な草原はみあらず、田畑のまわりの畦畔草原が主要な半自然草原となっています。しかし近年、大規模な圃場基盤整備によって、昔ながらの畦畔草原は急速に失われつつあります。圃場整備後の畦畔では、ツリガネニンジン、ヤマハッカなど、特定の草原生植物が欠落することが知られています。

さて、淡路島の北部には、伝統的な「両墓制」の墓地が数多くみられます。両墓制とは、遺体を埋葬する「埋め墓」（共同埋葬地）と、おまいのために墓石を建てる「詣り墓」を別々の場所に設ける葬送方式で、かつては近畿地方を中心に広く分布していました。火葬の発達によって両墓制墓地への埋葬は減っていると言われていますが、淡路島北部では、江戸時代よりつづく「埋め墓」「詣り墓」が今でも多数残されており、地域の人々によって掃除や草刈りなどの手入れがおこなわれています。

2010年の秋、兵庫県立大学緑環境景観マネジメント研究科の学生・高島基郎君が伝統的な墓地46ヶ所において植生調査を実施したところ、31ヶ所の墓地で、畦畔草原と似た種組成の半自然草原が成立していることがわかりました。これらの墓地は年1回から数回の草刈りがおこなわれており、チガヤ・ススキ・ネザサなどが優占し、ツリガネニンジン・ヤマハッカ・アキノタムラソウ・タツナミソウ・ネコハギ・ミヤコグサなど、圃場整備によって欠落しやすい草原生植物が混生していました（写真1）。絶滅危惧種であるツチグリ（写真2）の生えている墓地もありました。

半自然草原を有する墓地の約半数は、その周囲で



写真1 ミヤコグサが咲き乱れる墓地の草原

圃場整備が実施されており、墓地だけが造成を免れて残っていました（写真3）。このことに関して、地域の方に聞き取り調査をおこなったところ、“圃場整備や市道・県道の敷設は、墓地（とくに埋め墓）を避けておこなわれることが多い”、“先祖が眠っているために壊しにくい”、“土地所有が複雑で開発しにくい”などのご意見をいただきました。

以上の結果から、伝統的な墓地は草原を開発からまもっていることが示唆されます。

旅行の際、新幹線や特急列車の窓から景色を眺めると、丁寧に草刈りがおこなわれた小さな墓地があちこちで目につきます。こうした墓地には、その地域の刈り取り草原のなごりがみられるのかもしれませんが。

（澤田佳宏：兵庫県淡路島在住）



写真2 ツチグリ



写真3 圃場整備は墓地を避けておこなわれている

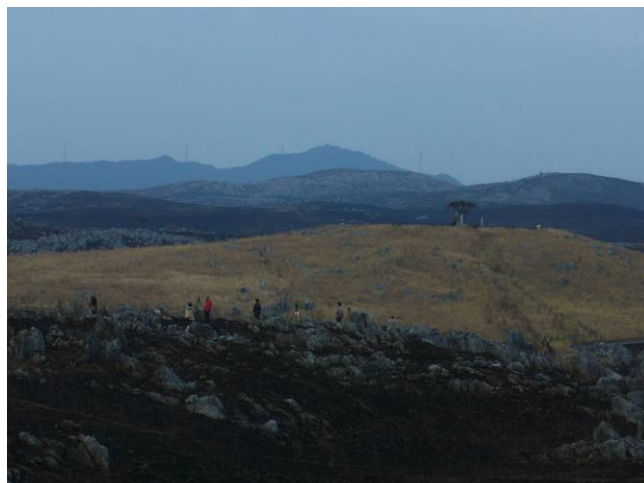
◇秋吉台の山焼き

「燃えないから安全」という言葉をよく聞く山口県秋吉台の山焼きですが、今年はその神話が崩れました。秋吉台では夜の山焼きを「野火の祭典」という観光イベントにしており、毎年2月第3日曜に行われる本番の山焼きでは夜の山焼き用に一部の草原を燃え残すようにします。そのため、草原の中にボランティアが入り、燃え残す部分を背に周囲から燃えてくる火に向かって迎え火を打ちます。

例年になく草が乾いていたという今年、勢いを増した炎は飛び火し、燃え残すはずだった部分もすっかり焼けてしまいました。草原の中の防火帯上にいたボランティアは、両側から迫ってくる火の中にいたこととなります。さすがに待避の号令がかかり事故などはありませんでしたが、「怖かった」という体験談は耳にしました。

秋吉台の火入れは、周囲から一斉に火を着けて台地の真ん中で火が出会えば鎮火するという形態です。現在は住民と行政など、ほぼ地元のみで山焼きを行っています。行政の職員であればマニュアルが配布されますが、外部のボランティアは火入れに対する知識もないまま作業に入ることも普通でした。昨年の野焼き事故を受けて、事前に消防署員の話聞く等の配慮はされるようになりましたが、それでも火のこわさを十分認識できるとはいいたくない状況です。さらに、消防団員が背負うジェットシューターは数が少なく、消化のための備えは十分とはいえません。

現在、山焼きは草原を守るという大前提の他に、イベントとして地元の大事な観光資源になっています。地元住民の高齢化・過疎化で山焼きそのものの



「野火の祭典」火入れ前（石田麻里氏撮影，2007/3/3）



「野火の祭典」（石田麻里氏撮影，2008/3/1）

継続も危ぶまれる中、今後外部のボランティアに担い手として関わってもらうことも考えなければなりません。そのためにも、現在の山焼きのシステムや安全対策を見直す必要があると感じました。また、問題の解決のために他地域の様子や工夫を知ることが重要で、山焼きに関わる行政の担当者等がこのネットワークを活用し情報収集できるよう提案していきたいと思いました。

（荒木(太田)陽子：山口県山口市在住）



秋吉台の山焼きボランティア（2008/2/29）

■書籍紹介

◇「信州の草原 その歴史をさぐる」

本書は、総合地球環境学研究所プロジェクト「日本列島における人間－自然相互関係の歴史的・文化的検討」(代表湯本貴和氏)の成果の一部で、土壌学、植生史学、林学、考古学、生態学などの各分野の専門家が、「信州の半自然草原の歴史」について、様々な角度から考証しています。

縄文から現代まで人間は草原とどうかかわってきたのか、新しい知見を盛り込みながら、分かりやすく解説されています。草原の保全、活用にかかわる方に必見の書です。ぜひ、一読をお奨めします。

湯本貴和・須賀 丈編著

発行：ほおずき書籍 発売：星雲社

¥1,785(税込) ISBN：9784434155413

まえがき－草原と人間

序 章 なぜ信州の草原なのか？

第1章 土壌に残された野火の歴史

第2章 草原と火事の歴史－阿蘇の研究から

第3章 土石流により現れた縄文と古代－埋没性黒色土層

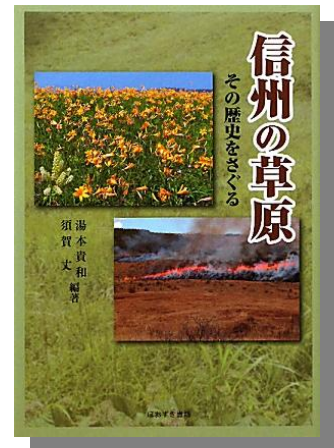
第4章 八ヶ岳山麓・霧ヶ峰周辺における縄文・中世の陥し穴

第5章 狩猟神事の盛衰

第6章 長野県におけるニホンジカの盛衰史

第7章 霧ヶ峰におけるニホンジカによる植生への影響

(事務局)



■草原をめぐる動き (2011年4月～7月)

4/9 雲月山山焼き (場所：雲月山 (広島県山県郡北広島町))

4/16-17 コモンズ村ふじわらの野焼き (場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水)

6/11 全国草原再生ネットワーク総会 (場所：TKP

日本橋ビジネスセンター (東京都中央区日本橋3-3-9 西川ビル 1F/B1F、03-3243-1531)

※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

■事務局からのお知らせ

総会のご案内

下記のとおり総会を開催します。みなさまの参加をお待ちしております。

<日時>2011年6月11日 15:00～18:00

<場所>TKP 日本橋ビジネスセンター (東京都中央区日本橋3-3-9 西川ビル 1F/B1F、03-3243-1531)
申し込みは下記事務局まで。当日の連絡は事務局まで (高橋泰子：090-4808-4753)

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol.6 2011年4月号

全国草原再生ネットワーク事務局

694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1

NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】このたびの東日本大震災で被害に遭われた方には、謹んでお見舞い申し上げます。今回の震災を通じて、あらためて自然の力、そしてその中で暮らしていることを実感しました。一日も早い復興を願っております。